

卒後1年目卒業生の教育内容の評価とキャリアアップの取組状況

－ 看護学部卒業生のアンケート調査より －

田中 久美子, 國分 真佐代, 土田 幸子, 林 暁子, 中井 三智子

鈴鹿医療科学大学 看護学部 看護学科

研究報告

卒後1年目卒業生の教育内容の評価とキャリアアップの取組状況

— 看護学部卒業生のアンケート調査より —

田中 久美子, 國分 真佐代, 土田 幸子, 林 暁子, 中井 三智子

鈴鹿医療科学大学 看護学部 看護学科

キーワード： 看護基礎教育, 卒業生調査, 教育評価, 新人看護師, キャリアアップ

要 旨

本学看護学部の教育評価を目的として看護学部卒業生を対象に、大学での教育内容の評価、卒業後のキャリアアップへの取り組み状況に関するアンケート調査を行った。調査は174名を対象に実施し、有効回答率は31.6%であった。看護基礎教育で修得した能力の有用性が評価されたが、一方で「国際的な視点で対象者を支援できる能力」や、「考え抜く力」、「前に踏み出す力」の有用性が低い結果となった。在日・来日外国人への医療提供システムの理解や社会資源の活用、主体性を高め自信を育む教育方法の実践などが本学の教育課題となる。今後は、臨地実習などを通して学習経験の機会を充実させ、キャリアアップへの取り組みが高められるように主体的学習能力の向上を図る必要があると示唆された。

I. はじめに

鈴鹿医療科学大学看護学部は「科学技術の進歩を真に人類の福祉と健康の向上に役立たせる」という大学建学の精神のもと、「高度な知識と技能を修得する」、「幅広い教養を身につける」、「思いやりの心を育む」、「高い倫理感を持つ」、「チーム医療に貢献する」という5つの教育目標を掲げて看護教育を行い、2021年3月までに344名の卒業生を輩出してきた。

国内の看護系大学は、1990年頃から急増し2020年度には274大学となっている。このような社会背景の中で中央教育審議会は、大学教育の質保証のエビデンスとして、学習成果など学生調査を活用する必要性を示唆している¹⁾。近年の社会保障改革、災害やグローバルな感染危機など目まぐるしい社会変遷の中で、卒業生が多様な変化に対応し看護の専門性を発揮していくためには、生涯にわたり主体的に自己学習を継続する能力が重要であると考えられる。そこで今回「教育の質」検証の一環として、本学看護学部卒業生を対象にアンケート調査を行い、卒業生からみた大学の教育内容の評価を得るとともに、卒業生のキャリアアップの取組状況と学部教育との関連について検討し、ここに報告する。

II. 調査方法

調査対象は、本学看護学部（以下学部）の2017年度（1期生）と2018年度（2期生）の卒業生174名で、調査期間は2019年3月～2020年8月である。卒業1年を経過した時点で、対象者に研究目的・方法・調査期間と研究における倫理的配慮を記載した説明書と研究協力依頼文書を郵送した。Webアンケート機能を用いた無記名調査票への記入と返信で回答を回収した。

調査内容は、対象者の属性として性別や就労状況、本学独自のカリキュラム「医療人底力教育（以下底力教育）」により修得を目指す4つの能力「コミュニケーション力」、「感じる力」、「考え抜く力」、「前に踏み出す力」および看護学部のディプロマポリシーに挙げられた5つの能力それぞれについて、卒業専門職者としての活動・実践への

役立ち度を5件法で尋ねた。また南堀らの研究²⁾を参考に教育内容（6項目）・学生生活（4項目）・学習環境（5項目）に関する達成感や満足感、卒業後の主体的自己学習能力として自己のキャリアアップへの取組状況について、同じく5件法で質問した。

分析は、各質問項目の記述統計を行ったのち、キャリアアップに「積極的に取り組んでいる」、「取り組んでいる」と回答した者を取組群、「どちらともいえない」、「あまり取り組んでいない」、「取り組んでいない」と回答した者を非取組群として、学習成果の役立ち度、教育内容等の満足度を2群間で比較（ χ^2 検定 有意水準を $p < 0.05$ 以下に設定）した。なお、分析はSPSS Ver.26を用いて行った。

倫理的配慮として、調査票は無記名で、得られた情報は本研究以外の目的に使用しないこと、調査への参加は自由意思であり、不参加による不利益を生じないこと、調査票への回答返信をもって研究協力への同意を得たものとし、操作上の理由から調査票返信後には協力承諾を撤回できないことを説明書に明記した。なお、本研究は、鈴鹿医療科学大学臨床研究倫理審査委員会の承認（平成31年4月10日承認番号376）を得て実施した。

III. 結果

対象者174名のうち1期生26名、2期生32名計58名から回答があり（回収率33.3%）、有効回答55名（有効回答率31.6%）を分析対象とした。対象者の属性は、男性10名（18.2%）、女性45名（81.8%）、現在看護師として就労している者52名（94.5%）、保健師2名（3.6%）、その他1名（1.8%）であった。

1. ディプロマポリシーと底力教育目標の有用性について（図1参照）

ディプロマポリシーの各目標について、「とても役に立つ」「役に立つ」と回答した者は「多様な医療状況において、適切な看護を提供できる知識・技術」67.3%、「人の尊厳を守り、相手の立場を理解し、倫理観をもって接

するコミュニケーション能力」85.5%、「保健・医療・福祉のニーズを理解し、課題に問題解決思考で取り組む能力」69.1%、「チーム医療の一員として他職者の役割を理解し、協働・連携する能力」69.1%とおおむね役立つと認識していた。しかし、「地域において医療を受ける人の国際化に伴って、国際的視点で支援できる能力」は

38.2%と低い値であった。

底力教育で身につけた能力に対して「とても役に立つ」「役に立つ」と回答した者は「コミュニケーション力」76.4%、「感じる力」60.0%と6割程度が役立つと認識していたが、「考え抜く力」56.4%、「前に踏み出す力」45.5%は、6割に満たない結果であった。

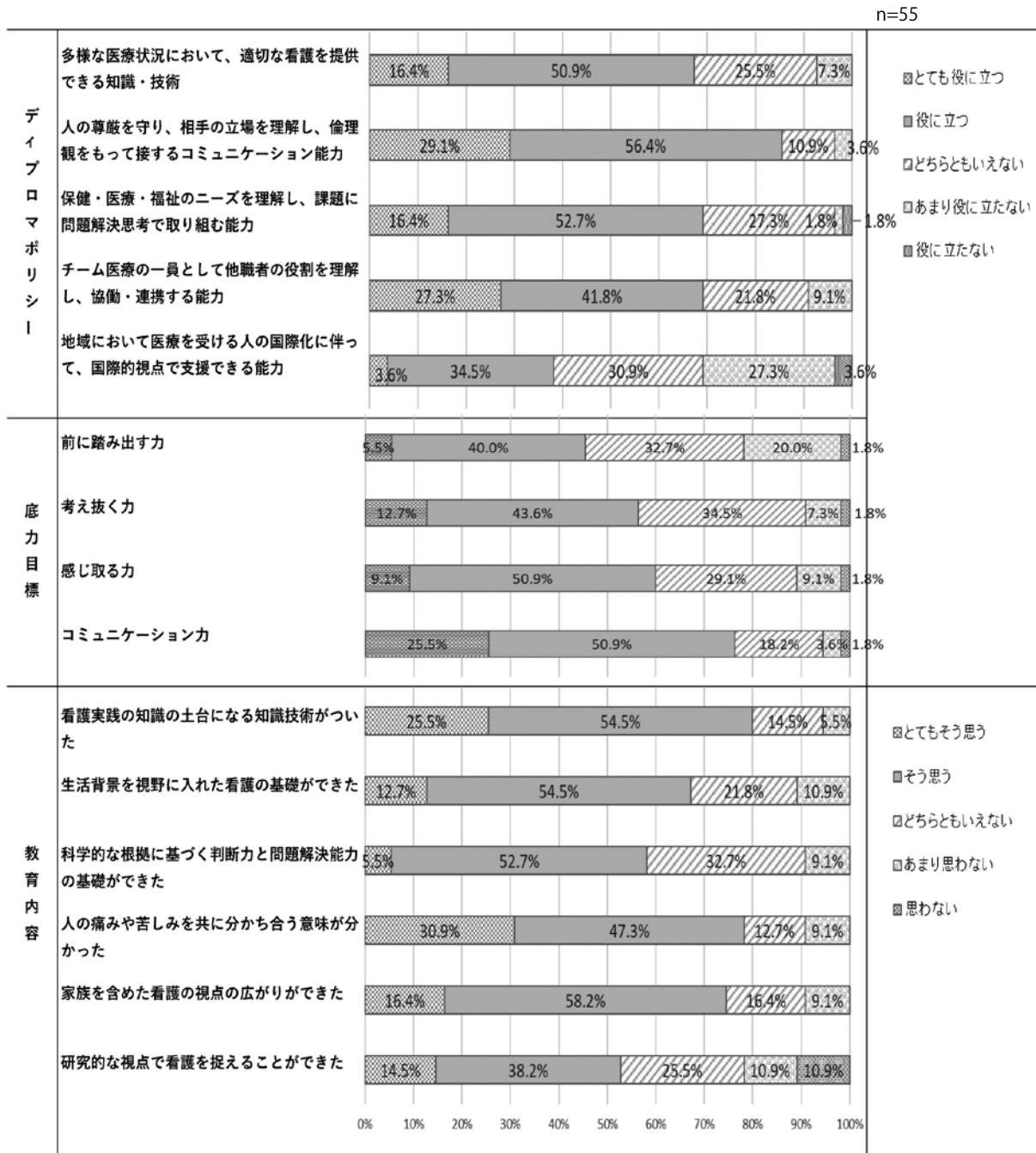


図1 ディプロマポリシー、医療人底力教育の目標の有用性と教育内容の達成感

ディプロマポリシー5項目、医療人底力教育4項目の各目標についての有用性と、教育内容6項目の達成感について、5段階で回答を求めた結果のグラフ表記。

表1 キャリアアップ取組状況と学習成果・教育内容の到達度の比較

							n=55	
		とても役に立つ	役に立つ	どちらともいえない	あまり役に立たない	役に立たない	Pearsonのχ ²	
		人数 (%)	人数 (%)	人数 (%)	人数 (%)	人数 (%)		
ディプロマポリシー								
多様な医療状況において、適切な適切な看護を提供できる知識・技術	取組群 (n=24)	5 20.8	14 58.3	3 12.5	2 8.3	0 0.0	3.854a	
	非取組群(n=31)	4 12.9	14 45.2	11 35.5	2 6.5	0 0.0		
人の尊厳を守り、相手の立場を理解し、倫理観をもって接するコミュニケーション能力	取組群 (n=24)	12 50.0	12 50.0	0 0.0	0 0.0	0 0.0	12.899a *	
	非取組群(n=31)	4 12.9	19 61.3	6 19.4	2 6.5	0 0.0		
保健・医療・福祉のニーズを理解し、課題に問題解決思考で取り組む能力	取組群 (n=24)	7 29.2	13 54.2	4 16.7	0 0.0	0 0.0	7.587a	
	非取組群(n=31)	2 6.5	16 51.6	11 35.5	1 3.2	1 3.2		
チームの一員として他職者の役割を理解し、協働・連携する力	取組群 (n=24)	9 37.5	11 45.8	3 12.5	1 4.2	0 0.0	4.628a	
	非取組群(n=31)	6 19.4	12 38.7	9 29.0	4 12.9	0 0.0		
地域において医療を受ける人の国際化に伴って、国際的視点で支援できる能力	取組群 (n=24)	2 8.3	11 45.8	7 29.2	4 16.7	0 0.0	7.500a	
	非取組群(n=31)	0 0.0	8 25.8	10 32.3	11 35.5	2 6.5		
底力教育の目標								
前に踏み出す力	取組群 (n=24)	2 8.3	12 50.0	6 25.0	4 16.7	0 0.0	3.499a	
	非取組群(n=31)	1 3.2	10 32.3	12 38.7	7 22.6	1 3.2		
考え抜く力	取組群 (n=24)	5 20.8	15 62.5	4 16.7	0 0.0	0 0.0	13.482a *	
	非取組群(n=31)	2 6.5	9 29.0	15 48.4	4 12.9	1 3.2		
感じ取る力	取組群 (n=24)	3 12.5	16 66.7	5 20.8	0 0.0	0 0.0	8.264a	
	非取組群(n=31)	2 6.5	12 38.7	11 35.5	5 16.1	1 3.2		
コミュニケーション力	取組群 (n=24)	10 41.7	11 45.8	3 12.5	0 0.0	0 0.0	7.691a	
	非取組群(n=31)	4 12.9	17 54.8	7 22.6	2 6.5	1 3.2		
教育内容 (学び)								
看護実践の知識の土台になる知識 技術が身についた	取組群 (n=24)	7 29.2	14 58.3	2 8.3	1 4.2	0 0.0	1.602a	
	非取組群(n=31)	7 22.6	16 51.6	6 19.4	2 6.5	0 0.0		
生活背景を視野に入れた看護の基礎ができた	取組群 (n=24)	4 16.7	14 58.3	5 20.8	1 4.2	0 0.0	2.425a	
	非取組群(n=31)	3 9.7	16 51.6	7 22.6	5 16.1	0 0.0		
科学的な根拠に基づく判断力と問題解決能力の基礎ができた	取組群 (n=24)	2 8.3	15 62.5	6 25.0	1 4.2	0 0.0	3.331a	
	非取組群(n=31)	1 3.2	14 45.2	12 38.7	4 12.9	0 0.0		
人の痛みや苦しみを共に分かち合う意味が分かった	取組群 (n=24)	7 29.2	10 41.7	5 20.8	2 8.3	0 0.0	2.550a	
	非取組群(n=31)	10 32.3	16 51.6	2 6.5	3 9.7	0 0.0		
家族を含めた看護の視点の広がりができた	取組群 (n=24)	2 8.3	16 66.7	4 16.7	2 8.3	0 0.0	2.234a	
	非取組群(n=31)	7 22.6	16 51.6	5 16.1	3 9.7	0 0.0		
研究的な視点で看護を捉えることができた	取組群 (n=24)	6 25.0	8 33.3	7 29.2	1 4.2	2 8.3	5.726a	
	非取組群(n=31)	2 6.5	13 41.9	7 22.6	5 16.1	4 12.9		
学習内容 (科目)								
教養科目	取組群 (n=24)	5 20.8	10 41.7	4 16.7	5 20.8	0 0.0	5.705a	
	非取組群(n=31)	3 9.7	16 51.6	8 25.8	2 6.5	2 6.5		
専門科目	取組群 (n=24)	9 37.5	10 41.7	4 16.7	1 4.2	0 0.0	5.853a	
	非取組群(n=31)	4 12.9	17 54.8	5 16.1	4 12.9	1 3.2		
卒業課題	取組群 (n=24)	12 50.0	5 20.8	4 16.7	1 4.2	2 8.3	4.870a	
	非取組群(n=31)	8 25.8	12 38.7	8 25.8	2 6.5	1 3.2		
臨地実習	取組群 (n=24)	10 41.7	10 41.7	4 16.7	0 0.0	0 0.0	10.847a *	
	非取組群(n=31)	3 9.7	19 61.3	4 12.9	3 9.7	2 6.5		
学生生活								
信頼できる友人に出会えた	取組群 (n=24)	19 79.2	5 20.8	0 0.0	0 0.0	0 0.0	4.967a	
	非取組群(n=31)	17 54.8	10 32.3	2 6.5	2 6.5	0 0.0		
他の学生と話をする機会	取組群 (n=24)	7 29.2	9 37.5	5 20.8	2 8.3	1 4.2	2.460a	
	非取組群(n=31)	4 12.9	16 51.6	7 22.6	3 9.7	1 3.2		
教員と話をする機会	取組群 (n=24)	10 41.7	12 50.0	1 4.2	1 4.2	0 0.0	4.564a	
	非取組群(n=31)	6 19.4	19 61.3	4 12.9	1 3.2	1 3.2		
大学での経験全般	取組群 (n=24)	12 50.0	9 37.5	3 12.5	0 0.0	0 0.0	8.443a *	
	非取組群(n=31)	5 16.1	20 64.5	4 12.9	2 6.5	0 0.0		

* p<0.05

キャリアアップの取組状況について取組群と非取組群の2群に分け、ディプロマポリシー、底力教育の目標・教育内容の有用性と、学習内容(学び)・学習内容(科目)・学生生活の満足度について、2群間の比較を実施した。

教育内容の達成感については、「知識技術」や「生活背景を視野に入れた看護」など「とてもそう思う」「そう思う」と回答した者の割合が6割を超えおおむね身に付いたと認識していた。しかし「判断力・問題解決能力」や「研究的な視点」については6割に満たなかった。

2. キャリアアップの取組状況について(表1参照)

キャリアアップの取組については、「積極的に取り組んでいる」12名(21.8%)、「取り組んでいる」12名(21.8%)、「どちらともいえない」22名(40.0%)、「あまり取り組んでいない」7名(12.7%)、「取り組んでいない」2名(3.6%)であった。次に、質問項目別にキャリアアップの取組群と非取組群の2群を比較したところ、取組群の方がディプロマポリシーの「人の尊厳を守り、相手の立場を理解し、倫理観をもって接するコミュニケーション能力」と、底力教育の「考え抜く力」に「役に立つ」と回答したものが有意に多く、学習内容の「臨地実習への満足」や学生生活の「大学での経験全般」も有意に高かった。その他の項目では有意差は認めなかった。

IV. 考 察

1. 卒業1年目における学部教育の有用性について

卒後1年目の時点で、7割程度の卒業生がディプロマポリシー5目標のうち4目標と底力教育4目標のうち2目標に関して役立ち度を高く認識していたことから、本学部の教育内容はおおむね卒後1年目にも有用性があると捉えることができた。しかしながら、ディプロマポリシーの【国際的視点で支援できる能力】と底力教育の【考え抜く力】、【前に踏み出す力】の目標は、卒業後の役立ち度が低かった。国際的視点での支援については、厚生労働省の看護基礎教育の充実に関する検討会において平成21年度から「国際社会において広い視野に基づき看護師として諸外国との協力を考える」、「国際化および情報化へ対応しうる能力を養う内容を含むものとする」こと

が指導要領に組み込まれ、在日・来日外国人の健康観と対象者の住む地域の保健医療システムの理解や必要な社会資源の活用が国際化の進む中で看護師に必要な能力とされている³⁾。このことから、本学の教育課題として今後の具体的な取り組みが必要であると考えられる。

次に、【考え抜く力】が低い役立ち度であった背景には、看護基礎教育で求められる【考え抜く力】と臨床現場で新人看護師としての責任やスピード感もあわせて求められる【考える力】に乖離があると考えられた。さらに、【前に踏み出す力】も低い役立ち度であった。これらが低い結果であったのは、対象者が質問項目の意図を理解できずに回答したとも考えられる。滝嶋は、プリセプターから見た新人看護師の困難点として社会人基礎力である「前に踏み出す力」としての「主体性」や「考え抜く力」としての「課題発見力」をあげている。そして、自分が行わなくても周囲の人が行ってくれたために主体性が育たず、体験が乏しいことによる自信のなさなどが課題であると述べている⁴⁾。今後は、主体性や自ら考える意識を高め【考え抜く力】を育成し、自信が高められ【前に踏み出す力】が育めるようにしていくことが重要である。そのためには、自発的に課題に取り組み自ら考え行動できる機会が持てるような学習支援が必要である。

2. キャリアアップに取り組む姿勢と学部教育との関連について

卒後1年目時点での主体的自己学習能力があると捉えられるキャリアアップ取組群の特徴は、底力教育の【コミュニケーション力】と【考え抜く力】の役立ち度と、【臨地実習】への満足度が有意に高かった。この特徴からは、【考え抜く力】が発揮できていると捉えられていることや、学内での底力教育や臨地実習を学んだ体験が、卒後のキャリアアップへの取り組む意識の形成に影響を及ぼしていたと推察することができる。学内の教育と臨地実習とを関連付けながら積み上げていく看護教育の重要性が改めて示唆された。一方、その卒業生が学部入学前からキャリアアップへの取組に高い意識を持っていたために、入学後の底力教育の【コミュニケーション力】や【考

え抜く力】あるいは【臨地実習への満足】にも意欲的に取り組んだ結果としての評価が得られたと推測することもでき、今後対象者の特性からも検討を進めていく必要がある。

V. まとめ

本調査により本学部卒業後1年目の新人看護師は、修得した能力をおおむね有用であると認識していることが明らかになった。今後は、主体的自己学習能力を向上していくために、学内からより臨床の場が想起できるように授業の工夫を行い臨地実習と関連させた学習経験を充実させていくことが重要である。

本研究の回収率は33.3%と低く、対象者の特徴を反映できていないと言いがたい。今後は、対象数を増やすことや卒業後1年目だけでなく縦断的な調査を行う必要がある。

引用文献

- 1) 中央教育審議会, 2040年に向けた高等教育のグランドデザイン(答申), 2018; https://www.mext.go.jp/content/1413315_017.pdf (2021. 6. 17 参照)
- 2) 南堀直之, 村井嘉子, 中道純子, 寺井梨恵子, 米田昌代, 井上智可, 他. 石川県立看護大学看護学部卒業生の動向調査, 石川看護雑誌, 2014; 11: 51-62.
- 3) 中越利佳, 森久美子, 田中祐子, 野村亜由美, 城宝環, わが国の看護基礎教育における国際看護教育の現状と課題, 愛媛県立医療技術大学紀要, 2014; 11(1): 9-13
- 4) 滝嶋紀子, 森千恵子, 新卒看護師の看護実践上の困難点と仕事の現場で求められている能力の関係, 川崎市立看護短期大学紀要, 2015; 20: 33-43.

— プロフィール —

田中 久美子 鈴鹿医療科学大学看護学部看護学科准教授 修士(看護学)

〔経歴〕2005年三重大学大学院医学系研究科看護学専攻修士課程終了, 2017年鈴鹿医療科学大学看護学部看護学科准教授。〔専門〕成人看護学。

國分 真佐代 鈴鹿医療科学大学看護学部看護学科教授 博士(医学)

〔経歴〕2000年聖隷クリストファー大学大学院看護学研究科修士課程修了, 2013年三重大学医学部博士課程生命医科学専攻博士課程修了, 2014年鈴鹿医療科学大学看護学部看護学科教授。〔専門〕母性看護学。

土田 幸子 鈴鹿医療科学大学看護学部看護学科准教授 修士(看護学)

〔経歴〕2003年三重大学医学部看護学科助手, 2007年三重大学医学部看護学科助教, 2008年三重県立看護大学大学院看護学研究科看護学専攻修士課程修了, 2014年鈴鹿医療科学大学看護学部看護学科准教授。〔専門〕精神看護学。

林 暁子 鈴鹿医療科学大学看護学部看護学科助教 修士(看護学)

〔経歴〕2002年三重大学医学部看護学科卒業, 2002年三重大学医学部附属病院看護部看護師, 2014年三重大学大学院医学系研究科看護学専攻修士課程修了, 2014年鈴鹿医療科学大学看護学部看護学科助教。〔専門〕基礎看護学, 看護教育, 看護技術教育。

中井 三智子 鈴鹿医療科学大学看護学部看護学科教授 博士(医学)

〔経歴〕1986年徳島大学教育学部特別教科(看護)教員養成課程卒業, 1989年三重県立看護短期大学助手, 2013年三重大学大学院医学系研究科看護学専攻修士課程修了, 2014年鈴鹿医療科学大学看護学部准教授, 2017年三重大学大学院医学系研究科博士課程生命医科学専攻博士課程修了, 2018年鈴鹿医療科学大学看護学部看護学科教授。〔専門〕基礎看護学, 難病看護。

Evaluation of nursing education from the perspective of graduates and the status of career advancement efforts

—Responses to questionnaire one year after graduating from the Faculty of Nursing—

Kumiko TANAKA, Masayo KOKUBU, Sachiko TSUCHIDA,
Akiko HAYASHI, Michiko NAKAI

Department of Nursing, Faculty of Nursing,
Suzuka University of Medical Sciences

Key words: Basic nursing education, graduate survey, educational evaluation, new nurse, career advancement

Abstract

The purpose of the study was to evaluate the quality of education in the Faculty of Nursing at Suzuka University of Medical Science (SUMS). Graduates of the Faculty of Nursing were asked to complete a questionnaire survey on the nursing educational contents in accordance with the curriculum policy of SUMS and the status of their career advancement efforts after graduation. The survey was conducted on 174 participants, and the valid response rate was 31.6%. The abilities acquired in basic nursing education were shown to be useful. However, the "ability to support the target person from an international perspective", the "ability to think through", and the "ability to step forward" were indicated to have low usefulness. These abilities were related to understanding the medical care provision system for foreigners residing in Japan and visiting Japan, utilizing social resources, and programming education methods that enhance independence and foster self-confidence. Therefore, it is necessary to enhance the opportunities for career advancement learning experiences through on-site training to further improve these abilities.